

十七世紀フランスにおけるペリアクトイの解釈

橋本 能

1. ウイトルーウィウスとペリアクトイ

1414年にイタリアで、古代ローマの建築家ウイトルーウィウス Vitruvius, Marcus Pollio (生没年代不明)の『建築書』*De architectura libri decem*の完本が発見された。イタリア・ルネサンスの古代劇場の研究はこの書の発見から始まり、以後ヨーロッパの劇場建築に大きな影響を与えた。この『建築書』の第五書第六章に、古代ギリシアの劇場の舞台装置について次のように記されている⁽¹⁾。

舞台そのものは、次のように配置される。中央の扉は王宮のように飾られ、左右の扉は来客のためにあり、両脇近くに舞台装置のために準備された空間がある。これらの空間は、ギリシア語でペリアクトイ *periaktoi* と呼ばれる。そのように呼ばれるのは三面の仕掛けのためである。この仕掛けは三面の上に多くの種類の主題が描かれていて回転する。劇中で場面が変わるべき時、または突然の雷鳴とともに神々が登場する時、この仕掛けは回転して、正面の装飾の様相を変える。これらの近くに、壁の角が突き出していて、壁の角は広場から舞台への入り口と郊外から舞台への入り口を囲んでいる。舞台装置は三つの種類がある。ひとつは悲劇と呼ばれ、第二は喜劇、第三はサテュロス劇と呼ばれる。これらの画題はそれぞれ互いに異なる。悲劇は円柱、破風、彫像や王家に付属のもので飾られている。喜劇は、一般の建物の建て方による私人の邸宅とバルコニー、実物のようにまねて作られた窓と景色で飾られている。サテュロス劇のセットは、木々、洞窟、山々、他の田舎の地形で描かれ、風景をまねて飾られている。

ペリアクトイは舞台の上に立てられた三角形の柱で、三面のそれぞれに舞台背景が描かれ、回転させて、演じられている場面を示した。ペリアクトイは、ルネサンス・イタリアで実際に試みられた⁽²⁾。フランスでは、ペリアクトイは1485年に街頭の活人画で使われた⁽³⁾。1617年に上演された宮廷バレーの『ルノー救出のバレー』*Ballet de la Délivrance de Renaud*にも使われている⁽⁴⁾。芝居では、1596年に上演されたニコラ・ド・モントルー Nicolas de Montreuil ou Montreux (1561-1610)の田園劇『アリメヌ』*Arimène ou Berger désespéré*使われている⁽⁵⁾。

文中の三種類の舞台装置、つまり悲劇、喜劇、サテュロス劇(田園劇)の舞台装置は、セバステイアーノ・セルリオ(1475-1554)の『建築書第二書』⁽⁶⁾(1545年)に描かれている(図版1-1, 2, 3)⁽⁷⁾。セルリオの描いた三種類の舞台装置の図は多大な影響を与え、以後のヨーロッパの舞台装置の

基本となった。

ペリアクトイが古代ギリシアの劇場で場面転換のための舞台装置として使われていたことは、ウィトルーウィウスの『建築書』から間違いない。しかし、それが舞台のどこに置かれたのか、今日まで分かっていない⁽⁸⁾。また三種類の舞台装置がどこに描かれていたのかも明らかではない。17世紀フランスでは、ペリアクトイと三種類の舞台装置はどのように理解されていたのだろうか。ウィトルーウィウスの『建築書』の翻訳からその検討を始めよう。

2. ルネサンス・イタリアにおけるペリアクトイの解釈

ウィトルーウィウスの『建築書』が1414年に発見されて以来、数多くの翻訳がイタリアで出版された。その中でもっとも評価が高いものは、1556年に出版されたダニエーレ・バルバロ（1513-70）の翻訳⁽⁹⁾である。

バルバロは、古代劇場の調査をもとに、翻訳に古代劇場の舞台正面の半分の図（図版2）⁽¹⁰⁾を載せている。これはピツェンツァにあるオランピコ劇場の舞台（図版3）⁽¹¹⁾とほぼ同じものである。オランピコ劇場は、バルバロの古代劇場の研究をもとに、1680年にバルバロの古代研究の協力者でもある建築家のパラディオ Palladio, Andre（1508-80）によって着工された。しかし、パラディオはその完成を見ずに死去し、弟子のヴィンセンツィオ・スカモッツィ Scamozzi, Vincenzo（1561-1625）の手で1584年に落成した。オランピコ劇場は、バルバロの考えていたギリシア・ローマの古代劇場の復元を実現したものといえよう。

現在のオランピコ劇場は舞台正面の三つの門の中に街路の舞台装置が固定されて常設されている。オランピコ劇場の街路の舞台装置とほぼ同じものが、バルバロの翻訳の正面図の三つの門の中に描かれている。パラディオの死後、劇場建設を引き継いだスカモッツィが現在の装置を設置したが、それはバルバロの翻訳の図版をもとに作られたと考えてよいだろう。

バルバロは、ペリアクトイが古代劇場のどこに置かれていたと考えたのだろうか。バルバロの翻訳は、古代劇場の舞台平面図（図版4）⁽¹²⁾も載せている。よく見ると、オランピコ劇場で三つの門の後ろの街路の舞台装置が置かれた位置に三角形が描かれている。この三角形がペリアクトイである。バルバロの翻訳に載っている正面図と平面図を合わせて考えると、三つの門の後ろにペリアクトイを配置し、その一面に街路の舞台装置が描かれたと考えられる。

次に、バルバロは、三種類の舞台装置がどこに描かれたと考えたのだろうか。三種類の舞台装置は現存しない。古代劇場の実地調査からペリアクトイの配置は推定できても、現存しない三種類の舞台背景の手がかりはつかめなかったのだろう。バルバロは、翻訳に三種類の舞台装置の図を載せていない。

すでに述べたとおり、1545年にセバステアーノ・セルリオは、『建築書 第二書』の中で、ウィトルーウィウスの三つの舞台装置を描いている。セルリオは、これらの舞台装置を一点透視線遠近法で描いている。古代ギリシアにおいて、三種類の舞台装置が一点透視線遠近法で描かれた根拠は

ない。一点透視線遠近法を使って三種類の舞台装置を描いたのは、あくまでもセルリオの想像にすぎない。

『建築書』の中でセルリオはペリアクトイについて触れていない。セルリオは実際に仮設の舞台を組むとき、ペリアクトイを使わず、舞台手前から奥に数列の張物を並べ、そこにこの舞台背景(図版6)⁽¹³⁾を描いている。

その後、バルバロは1569年に『ダニエーレ・バルバロ氏の遠近法の製作法』⁽¹⁴⁾を出版しているが、この中で、三種類の舞台装置(図版5)⁽¹⁵⁾を載せている。そこに載せられた三種類の舞台装置は、セルリオの『建築書 第二書』の図版とまったく同じものである。ウイトルーウィウスの翻訳(1556年)の後、バルバロは三種類の舞台装置にセルリオの案を採用したのだろう。

バルバロの翻訳の舞台正面図にも平面図にも、三種類の舞台装置は記されていない。バルバロの推定したギリシア・ローマの古代劇場、ひいてはそれを実現したオランピコ劇場に三種類の舞台装置を置くとしたら、ペリアクトイに描くしかない。おそらくバルバロは、三種類の舞台装置がペリアクトイに描かれたと考えていたのであろう。この考えをさらに押し進めたのが、ペローの翻訳である。

3. 17世紀フランスにおけるペリアクトイの解釈

17世紀フランスではペリアクトイと三種類の舞台装置はどのように考えられていたのか。ウイトルーウィウスの『建築書』は、1547年にジャン・マルタン(?-1553)の手ではじめて仏訳された。マルタンはルノンクール枢機卿 Cardinal de Lenoncourtの秘書を務め、当時翻訳家として名高かった。イタリア語とラテン語の多くの著作の翻訳を手がけ、セルリオの『建築書 第二書』の翻訳にも協力している。マルタンの翻訳は版を重ね、1673年にクロード・ペローの新訳が出るまで、他に翻訳はない。マルタンは、ペリアクトイの部分を次のように訳している⁽¹⁶⁾。

舞台に関しては、次のように配置されることが必要である、中央の門の向こうには王侯のための王宮があり、左右に客用の出入り口がある。つぎに舞台装置のための空間があり、舞台装置はギリシア人がペリアクトイと呼ぶものだが、そう呼ばれるのは心棒の上に三面がある仕掛けで、操作係の意志で動いて観客の眼をくらます。その三つの多様な飾りは、筋を変える必要があるか、突然の雷と雷鳴とともに神が降臨する時、それがあっても分からないように観客が気づかないほど巧みに回転して、その面を変えるとよい。

1547年版のジャン・マルタンの翻訳に劇場平面図(図版7)⁽¹⁷⁾が載っているが、これはセルリオの建てた仮設舞台の図と同じもので、ペリアクトイは描かれていない。三種類の舞台装置の図版も載っているが、セルリオの『建築書 第二書』の図版と建物の装飾に違いはあるものの、それらの舞台装置(図版8)⁽¹⁸⁾の構成はほとんど同じものである。この翻訳では、ペリアクトイの配置につい

て一切触れられていない。ペリアクトイと三種類の舞台装置の関係については曖昧なままである。

翻訳ではないが、1557年にジャン・ガルデが『マルク・ウイトルーウィウス・ポリオンの建築十書の抜書き、または要約された抜粋』⁽¹⁹⁾を刊行した。ガルデについては、その生没年代も経歴もまったく分からない。ガルデは、ペリアクトイと三種類の舞台装置について次のように述べている⁽²⁰⁾。

舞台に関して、それを見事に作るために、中央の門は王宮のように美しくなくてはならない、そしてその両側に来客用の出入り口がある。ところで、出入り口はギリシア人によってペリアクトイとよばれる演技の装置に充てられ、この装置は心棒を中心に回転する三面の道具である。この出入り口のそれぞれの空間に、三種類の装飾がなくてはならない。筋が変わって、突然、雷と雷鳴とともに神々が降りてくる時、それは回転して、別の装いの面を見せる。この出入り口の後ろに、道が舞台の端に向かって伸びている。舞台は、さまざまな装いを持つ。というのは、悲劇的な舞台は円柱、建物の正面、彫刻、そのようなもので装われ、王権と領主を感じさせる。喜劇の舞台は普通に装った個人の家を表す。しかし、風刺劇の舞台は風景と田舎のものの配置で作られている。

この書はペリアクトイと三種類の舞台装置を簡潔に要約しているが、ペリアクトイについては、「ギリシア人によってペリアクトイとよばれる演技の装置に割り当てられた出入り口」、「この出入り口のそれぞれの空間に、三種類の装飾がなくてはならない」と記している。ガデは、バルバロと同様、ペリアクトイを出入り口の後ろと考えている。三種類の舞台装置については、舞台全体として理解しているようではあるがこの文章だけでは曖昧で分からないし、図版もない。

1673年にクロード・ペロー（1613-1688）はルイ十四世治下の学術振興政策の一環としてコルベールに命じられて、ウイトルーウィウスの翻訳を刊行した⁽²¹⁾。クロード・ペローは、シャルル・ペローの兄で、医者、科学アカデミーの会員で、ルーブル宮の列柱の建築案を作成、パリの天文台などを建造した当時の有数の科学者である。

ペローの翻訳に劇場の平面図（図版9）と劇場平面図（図版10）が載っている⁽²²⁾。バルバロの注釈書の図版とはほぼ同じものである⁽²³⁾。つまり、ペリアクトイは門の後ろの三角形で示されている。ペローは、ペリアクトイに関する部分を次のように翻訳している⁽²⁴⁾。

舞台は、中央に王宮のもののように飾られた門、左右に客人のための二つの門が開けられ、配置されている。この開口部の後ろに回転する三角柱でつくられた仕掛けであるためギリシア人がペリアクトイと呼んだ舞台装置が置かれる。それぞれの仕掛けには、三種類の装飾がなくてはならない。それは回転して異なった場面となり、場面転換に役立つ。だから、それは物語の上演に必要であり、たとえば耳を驚かす雷鳴とともに神々が現れる時のような場合に。舞台のこの面の向こう側に、別の二つの入り口をもち、前に出る道を作らなければなら

ない。ひとつは広場から来て、もうひとつは田舎から舞台に到着する。

ペローは、ペリアクトイの置かれる位置を「開口部の後ろ」*derrière ces ouvertures*と訳している。この部分のラテン語の原文は *secundum autem spatia ad ornatus comparata* で、「その近くの空間に装置を置く」で、その後に関係節で「(そこは)ギリシア語でペリアクトイと呼ばれる、そのように呼ばれるのは三面の仕掛けのためである」と続いている。

ジャン・マルタンは「つぎに舞台装置のための空間があり」と訳していた。また、現代の英訳本では「両脇近くに」*next on either side*⁽²⁵⁾と訳され、日本語訳では「これのとなりに装飾された空間があり」⁽²⁶⁾と訳されている。なお、羅仏対訳本⁽²⁷⁾は現在順次刊行されているが、第五書の巻はいまだ未刊で、参照することはできなかった。いずれにしても、この部分を「開口部の後ろ」と訳すことで、ペローがあえて原文の翻訳に独自の見解を加えているといえよう。

三種類の舞台装置についても、ペローはその註で次のように述べている⁽²⁸⁾。

明らかにこの三種類の場面は装置として使われた回転する仕掛けに描かれた場面としか理解できない。舞台の建物は変えられず、舞台の構造と石積みの一部をなしているからである。

この注から、バルバロの図版をもとに、ペローはペリアクトイと三種類の舞台装置の関係を合理的に理解しようとして、いっそう踏み込んだ自分の解釈を加えているといえよう。

4. ペリアクトイと透視図法背景

ペリアクトイは、フランスでは16世紀末から17世紀前半にかけて実際に舞台装置として使われている。16世紀末にニコラ・ド・モントルーの田園劇『アリメーヌ』(1596年)で、ペンタゴンという五角柱が使われている。劇中の五つの幕間狂言で場面が変わるごとに回転し、場面の転換を行った。その使用方法は、ペリアクトイと同様である。ト書きによれば、ペンタゴンは舞台奥に4基並べられ、「遠近法」で場面を表した⁽²⁹⁾。

『ルノーの救出』(1617年)でもペリアクトイと同様に回転する舞台装置が使われている。この宮廷バレエでは、舞台奥に設けられた回転扉のような舞台装置が回って場面転換を行い、舞台全体は遠近法で構成されている⁽³⁰⁾。

舞台背景に使われた「遠近法」は、ルネサンス・イタリアから始まった一点透視線遠近法をさす。一点透視線遠近法を使った舞台装置は、透視図法背景と呼ばれる。

17世紀フランスのイエズス会士デュブリユ(1602-1670)の『实用遠近法』(1642-49年)⁽³¹⁾は、絵画を一点透視線遠近法で描く方法を説明した書である。ペリアクトイ(図版11)⁽³²⁾は舞台奥の全面を覆い、古代の劇場の装置とはおよそ異なるものであるが、ここでもペリアクトイは透視図法背景の一種として説明されている。

『建築書』出版の翌年の1674年に、ペローは『ウイトルーウィウスの建築十書の要約』を発表しているが、三種類の舞台装置について次のように記している⁽³³⁾。

この三つの門は、三角柱で作られ、描かれた三面で構成された仕掛けで閉じられ、遠近法で建物を表している。これらの仕掛けは、仕掛けを回転させて場面転換に役立ち、絵画は三種類の建物を表し、三種類の場面、つまり悲劇は壮麗な宮殿で、喜劇は個人の家々で、風刺劇つまり田園劇は田園風景で、三種類の場面を作っていた。

この『要約』から、ペローも三種類の舞台装置を透視図法背景と考えていることが分かる。

固定式の張物を使った透視図法背景はイタリアの最新式の舞台装置として、1641年にデマレ・ド・サンソラン Desmarests de Saint-Sorlin (1595-1676) の『ミラム』*Mirame* でフランスに紹介された。一方、場面転換を必要とする場合はスライド式の張物が使われた。スライド式張物は、イタリアで考案された透視図法背景である。それは舞台手前から奥に向かって張物を何列も並べ、全体として舞台奥に消失点を結ぶ遠近法の舞台背景を作り出す。しかも、この張物の下に車輪がつけられ、舞台に埋め込まれた溝のうえを移動できたから、張物を入れ替えることですばやい場面転換が可能になった。スライド式張物は1647年にロッシ Louiji Rossi (1497-1653) のオペラ『オルフェオ』*Orphée* でフランスではじめて使用された⁽³⁴⁾。以後18世紀までスライド式張物はフランスの基本的な舞台装置となった。

ペローはまた、ウイトルーウィウスの『建築書』の翻訳の注で、次のように記している⁽³⁵⁾。

ペリアクトイとは、ギリシア人が Periactous と呼んでいる舞台装置。舞台装置のわがフランスの言葉は、都合よくウイトルーウィウスの言葉 Ornatus (装飾) を表している。これらの装飾は、ウェルギリウスの *Servilus sur les Georgiques* によれば、二種類ある。というのは、ギリシア人が Periactous (ペリアクトイ) と呼ぶ三角柱で作った仕掛け、つまり回転し、それぞれ三種類の異なった場面を提供する仕掛けのほかに、古代人は他の仕掛けも持っていた、その仕掛けはいまでもわが国の劇場でも使われ、その働きは、横に移動させて違った場面を表すことにある。したがって、そのひとつを引くと、後ろに隠されていた別のが表れる。そのひとつは ductilis、もうひとつは versatilis とよばれる。しかしながら、これらの場面転換が、わが国の場面転換ほどすばやいとは思えない。わが国の場面転換は、ほとんど一瞬で、観客が気づかないほどである。だから、われわれの解するところでは、古代人が舞台の飾りを変えようとする、後ろに場面転換に必要なものを前もって作っておいた siparium とよばれる幕を引くのである。

Ductilis と versatilis に当たる舞台装置の記述は、ウイトルーウィウスにはない。Ductilis は重ねられた背景幕で、背景幕を両袖に引くと中央から割れて新しい背景幕が現れる仕掛けである⁽³⁶⁾。

Versatilis も背景幕の引き方で区別したものでほぼ同様の舞台装置である。この註からペローが、「わが国の場面転換」の舞台装置が古代の場面転換のための舞台装置に取って代わったと考えていることが窺える。

ペリアクトイは古代ギリシアの時代の産物であって、古代劇場でペリアクトイが透視図法背景として使われていたわけではない。一方、ルネサンス・イタリアから始まった透視図法背景は、さまざまな試みがなされた。スライド式の張物が舞台装置として普及するまで、ペリアクトイもその試みのひとつとして使用された。17世紀フランスにおいても、ペリアクトイは透視図法背景の一種と考えられ、使用されていたのである。

注

- (1) Vitruvius, *On architecture*, edited from the Harleian Manuscript 2767 and translated into English by Frank Granger, Harvard University Press, 1955, volume one, pp.288-289.
- (2) 福田晴虔『建築と劇場』、中央公論美術出版、1991年、80頁。
- (3) ジョージ・R・カーノードル『ルネサンス劇場の誕生』、佐藤正紀訳、晶文社、1990年、159頁。
- (4) Margaret M. McGowan, *L'Art du Ballet de cour en France 1581-1643*, C.N.R.S., 1978, p.62.
- (5) 拙論「十六世紀の田園劇『アリメヌ』とペリアクトイ」、鈴木康司中央大学教授退職記念論文集、2004年。
- (6) Sebastian Serlio, *Le Premier livre d'Architecture de Sebastian Serlio*, Paris, 1545.
- (7) チェザーレ・モリナーリ『演劇の歴史』倉橋健訳、PARCO出版局、1977年、(上)、128頁。
- (8) S・ティドワース『劇場』、白川宣力、石川敏男訳、早稲田大学出版部、1986年、9頁。
- (9) Daniele Barbaro, *I Dieci Libri dell'architettura di M. Vitruvio tradutti et commentati da Mons. Barbaro*, Venezia (rev. 1567: ed., fac., Milano 1987). (BNF : 4-V-47378 (8))
- (10) *Ibid.*, p.253-254.
- (11) Pierre Sonrel, *Traité de scénographie*, Librairie Theatrale, 1984, Pl. IV.
- (12) *Op. cit.*, 1629年版、p.249.
- (13) 前掲書、『劇場』64頁。
- (14) Daniele Barbaro, *La Pratica della prospettiva di Monsiegnor Daniel Barbaro*, 1569, Venetia (BNF : MICROFILM M-1229)
- (15) *Ibid.*, p.356-358.
- (16) Jean Martin, *Architecture ou Art de bien bastir, de Marc Vitruve Pollion....*, Jacques Gazeau, 1547, folio. 77.
- (17) *Ibid.*, folio. 76.

- (18) *Ibid.*, folio. 78-79.
- (19) Jean Gardet, *Epitome, ou extrait abrégé des dix livres d'architecture de Marc Vitruve Pollion,....*, Tolose, G. Boudeville, 1557. (BNF: RES-V-327)
- (20) *Ibid.*, pp.144-145.
- (21) *Les dix livres d'architecture de Vitruve*, Bibliothèque de l'Image, 1995.
- (22) *Ibid.*, pp.168-9, p. 171.
- (23) *Ibid.*, p.171.
- (24) *Ibid.*, pp.167-169.
- (25) *Op. cit.*, p.288.
- (26) 『ウイトルーウィウス建築書』 森田慶一訳注、東海大学出版会、1989年、130頁。
- (27) *Vitruve de L'Architecture*, texte établi, traduit et commenté par Philippe Fleury, Les Belles Lettres, 1969-95, 10 volumes.
- (28) *Op. cit.*, p.170.
- (29) 前掲書、「十六世紀の田園劇『アリメヌス』とペリアクトイ」。
- (30) 拙著『遠近法と仕掛け芝居』、中央大学出版部、2000年。
- (31) Le P. Jean Dubreuil, *La Perspective pratique par un Parisien de la Compagnie de Jesus*, Jean du Puis, 1642-49.
- (32) *Ibid.*, Troisième partie, folio. 102.
- (33) Claude Perrault, *Abrégée des dix livres d'architecture de Vitrouve*, J.-B. Coignard, 1674, pp.183-184. (BNF : MFICHE V-21991)
- (34) 前掲書『遠近法と仕掛け芝居』。
- (35) *Op. cit.*, p.168.
- (36) 新関良三『ギリシャ・ローマの演劇』東京堂出版、1968年、54頁。



図版 1-1

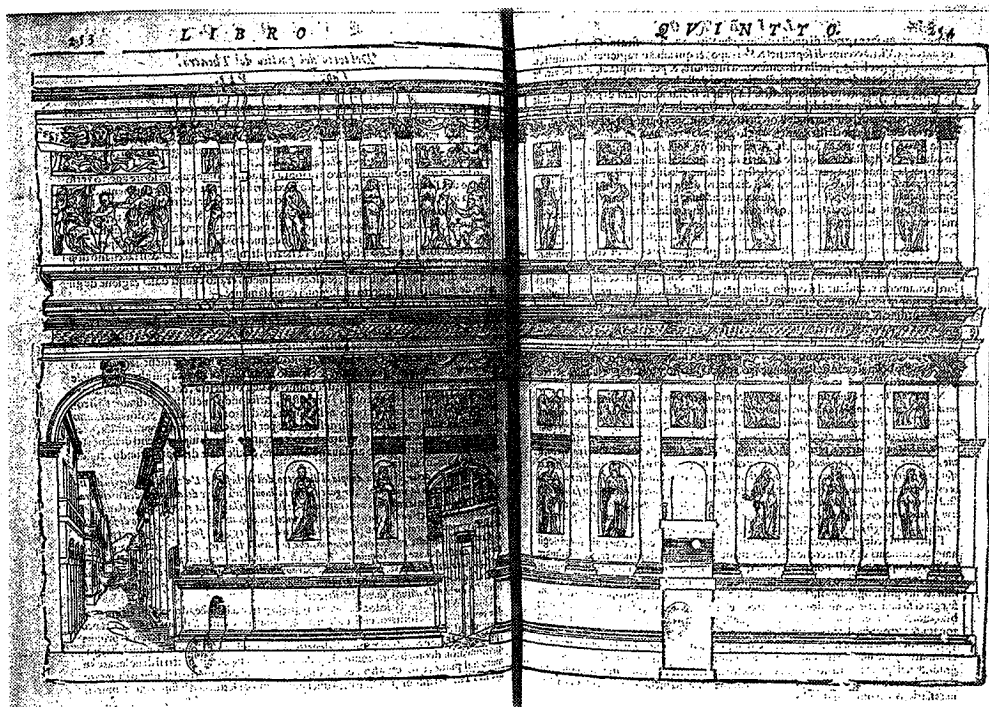


図版 1-2

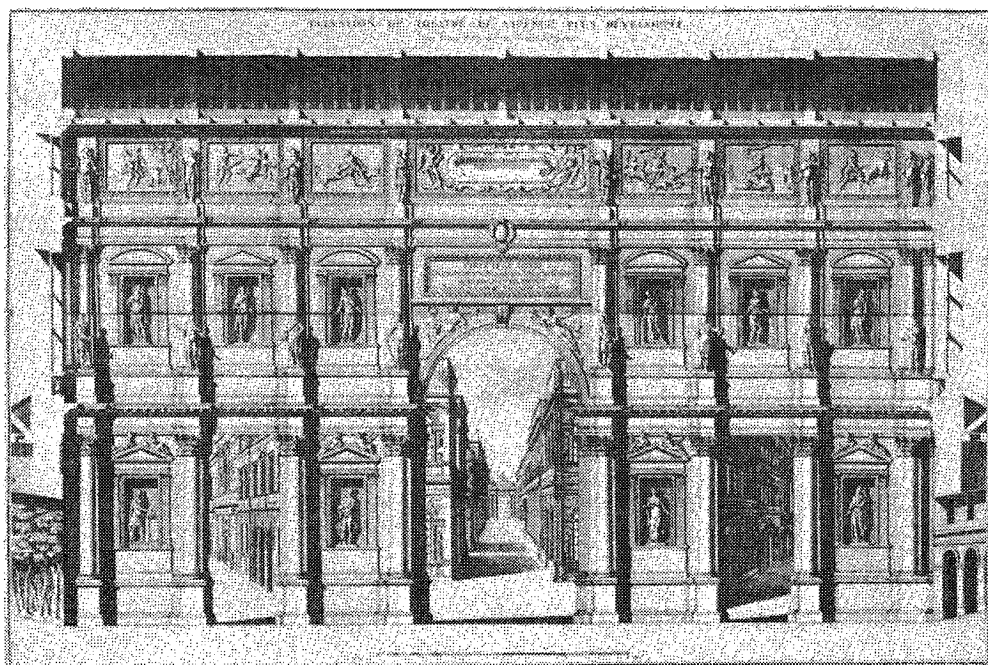


図版 1-3

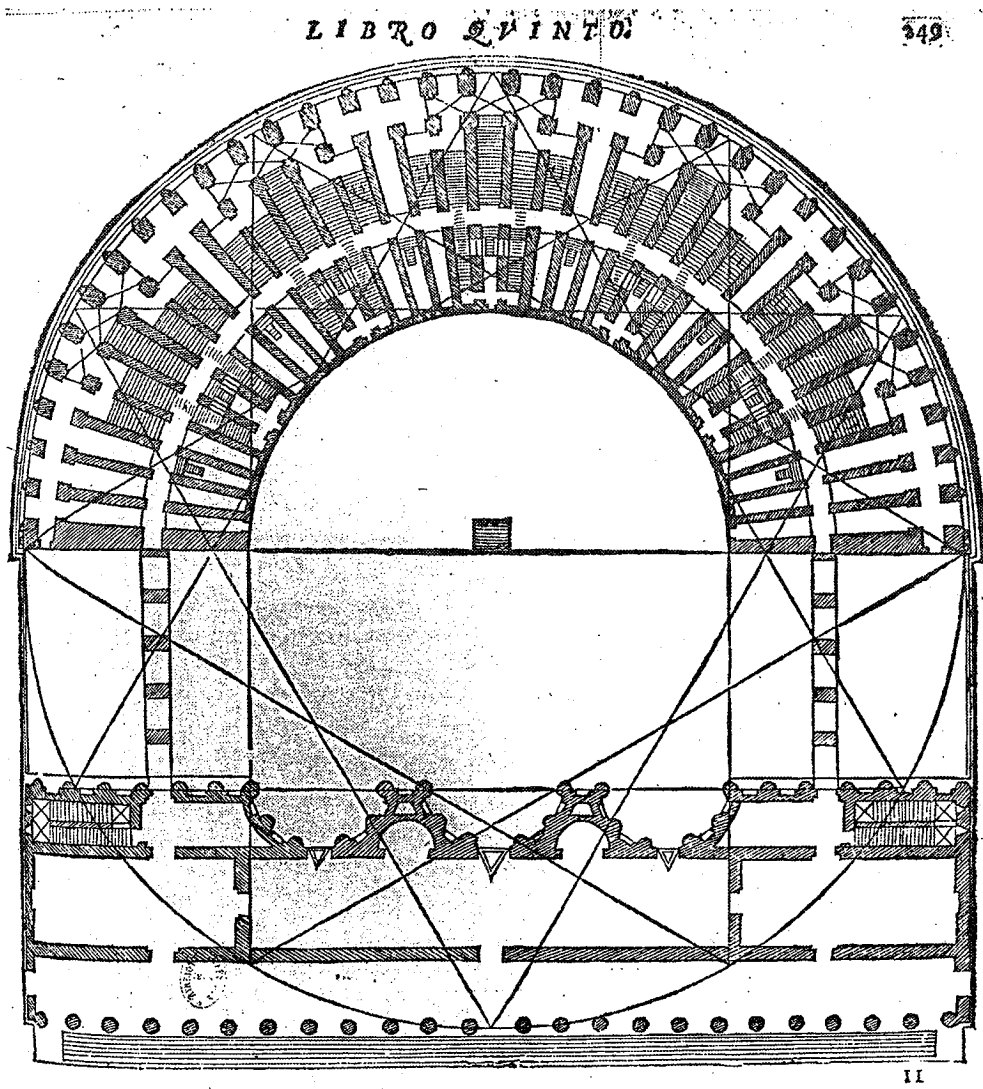
図版 1 セルリオ『建築書 第二書』：三種類の舞台背景



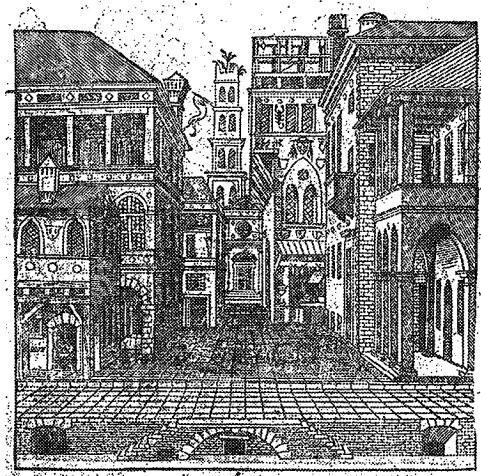
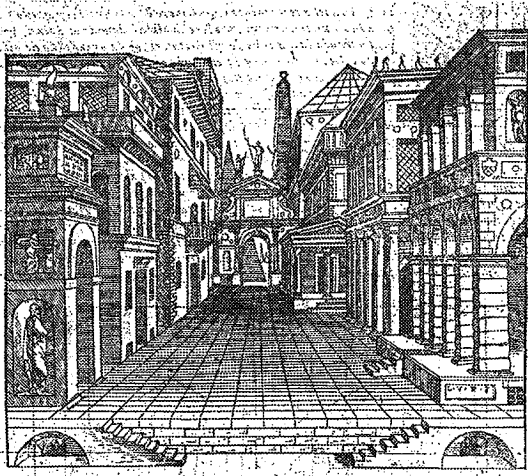
図版2 バルバロ『建築書』：古代劇場正面図



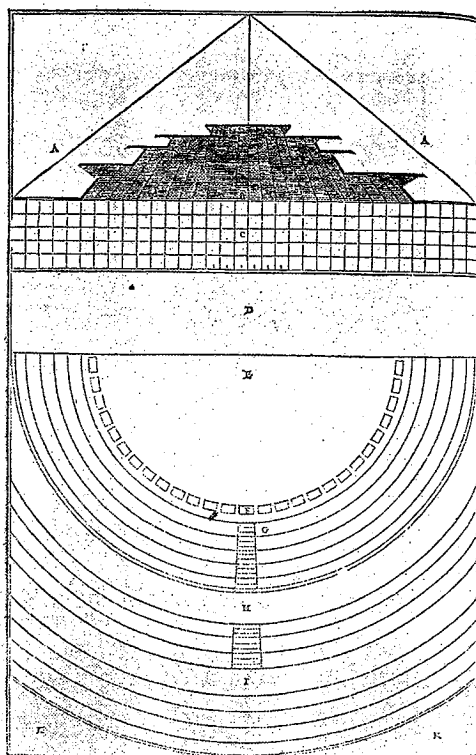
図版3 オランピコ劇場



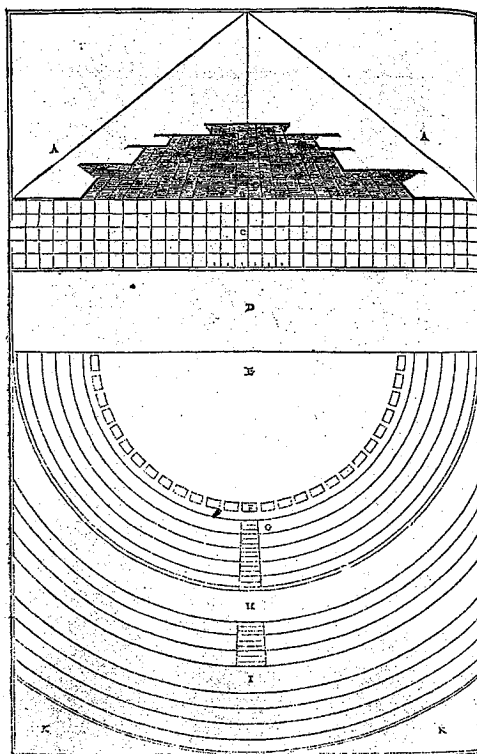
図版4 バルバロ『建築書』：古代劇場平面図



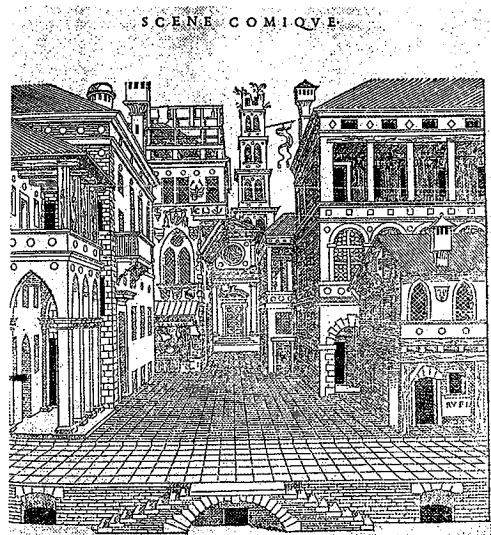
図版5 バルバロ「遠近法製作法」：三種類の舞台装置



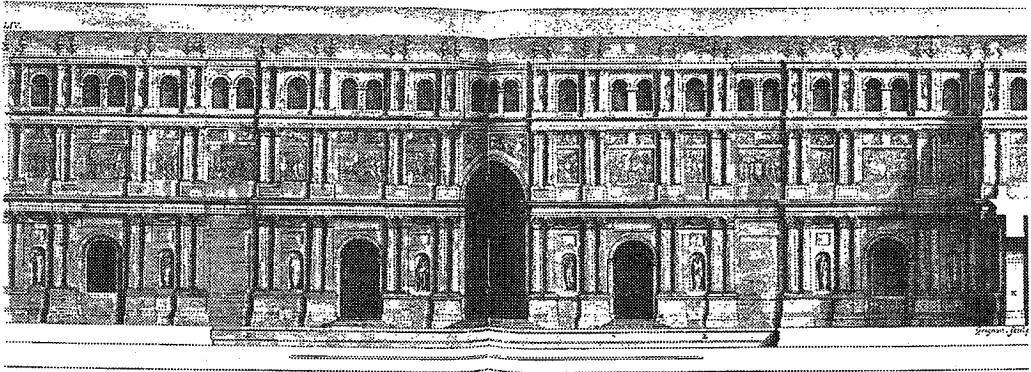
図版6
セルリオ「建築書 第二書」：舞台装置平面図



図版7
ジャン・マルタン「建築書」：劇場平面図

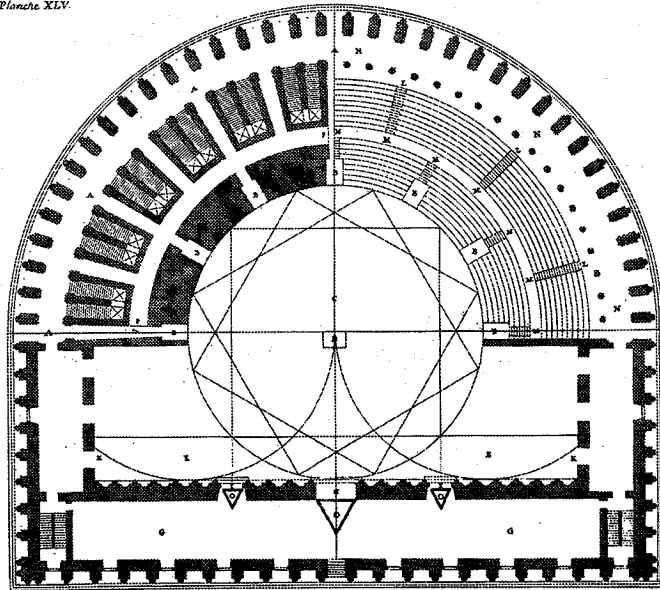


図版8 ジャン・マルタン『建築書』：三種類の舞台装置

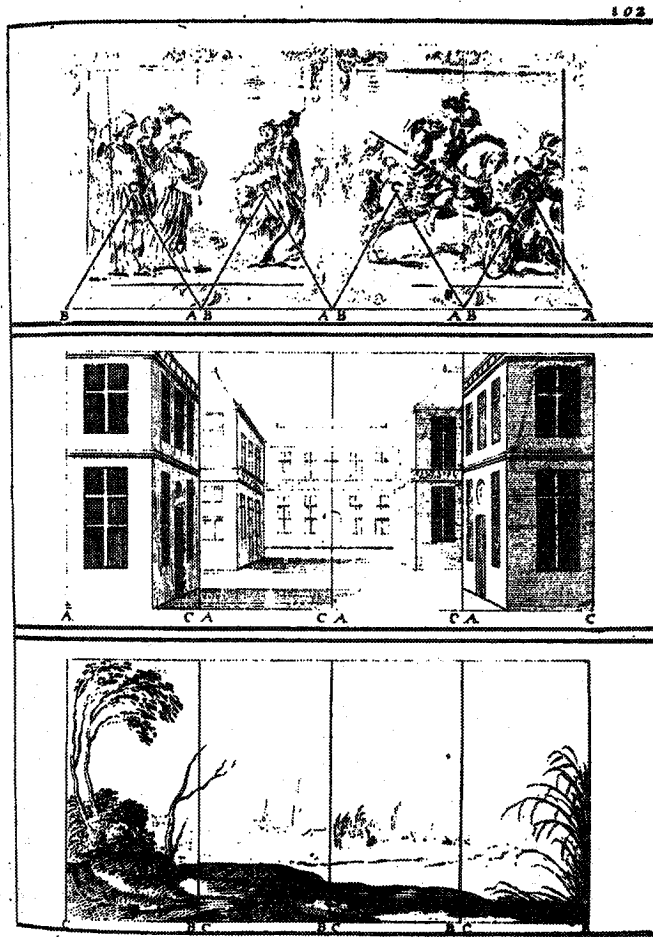


図版9 ペロー「建築書」：劇場正面図

Plaque XLV.



図版10 ペロー「建築書」：劇場平面図



図版 11 デュブルイユ『実用遠近法』：ペリアクトイ